

会長随想

私と軟式庭球

阿部 茂樹

新居浜市体育協会 五十周年
おめでとうございます。

幼い頃、父の試合に連れられたのが、私と軟式庭球の出合いです。ボールを追っかけた楽しさを思い出します。少年期は、太平洋戦争の為にスポーツどころではなかったのですが、終戦後の昭和二十一年西条中学二年の時に入部し、父のラケットをもらって使ったのがプレーの始まりです。昭和二十八年、第八回四国国体が開催され、軟式庭球は新設された松山市の堀之内コートで実施、私は審判員として参加した憶えがあります。大
学三年の時です。

昭和三十年、新居浜西中の教諭となり、部顧問となったのが軟式庭球の指導の始まりです。当時の新居浜市の中学校では、北中が大変強く、指導者は先輩の小西俊博先生でした。この北中を破ろうと生徒と共に頑張ったものです。西中にはコートがなく、王子町の住友五社のコートや、市役所のコートを借りたり、運動場に移動式ボールを立てて、即席のコートを造ったりして練習をしていました。昭和三十三年頃に保護者の協力を得て、生徒と一緒にコート造りを行い、一面のコートが完成して一段と練習に熱が入ったものです。この頃になると、中学は北中と西中、高校は両中学の卒業生が進学した西高が県内では実力校として認められていました。

利吉氏、今井利昌氏など、名実共にすばらしい先輩が多くおられました。そして私の父、秀一もその中に入れて頂けるように思います。なかでも芝氏は、フクヤスポーツ店を経営され、新居浜軟式庭球連盟の初代会長、県の副会長、日本軟式庭球連盟の本部役員も勤められ、新居浜市は勿論、愛媛県、日本の軟式庭球界に数知れぬ功績を残された偉大な指導者です。昭和五十九年に逝かれましたが、私達新居浜の仲間には、物心両面で大変頼りにし、お世話になったものです。これ等の先輩は、近くの中学校、高校のコートによく集まり、中高生を指導すると同時に練習に励まれていました。お陰で中高生は、次第に力をつけ、県大会、四国大会、全国大会でも好成績を挙げるようになってきました。

昭和四十七年に市営コートが現市営球場の地に五面開設され、練習、試合のメイン会場となり、大会運営も楽になりました。市体育協会の後押しと、芝氏等諸先輩の尽力で実現したのでした。これを期に、住友五社、市役所等の軟式テニスマンが、それぞれのクラブを組織し直し、昭和五十年には十余のクラブが登録され、活発な活動が行われるようになりました。市役所の山内秋夫氏、住友の大畠健二氏等、素晴らしいリーダーが活躍しておられました。残念なのは、山内氏が早世されたことです。二代目会長に尾崎正氏が迎えられ、軟式庭球連盟の組織が本格的に整備されていきます。

尾崎氏の不慮の御逝去により、私が三代目の会長をお引き受けすることになり、(故)本田修氏を副会長に迎え、連盟の活動の

促進を第一の目標にして、馬越伸夫理事長を先頭に積極的に進めました。三十年程続いた住友招待を新居浜近県大会として引き継ぎ、今年で二十八回となり、毎年多くの参加を得て盛大に開催されています。一方、市内大会も普及と強化を目指して、中学校体育連盟、高等学校体育連盟の協力を得て、中学生も参加の大会を毎月一回以上実施してまいりました。また、若年理事、

中学高校教師、OGの指導者などの援助で、家庭婦人ソフトテニス教室、小学生ソフトテニス教室、中学生対象の基本練習会、中生対象の強化練習など、普及・強化指導に意欲的に取り組んできました。

昭和六十年頃から、家庭婦人ソフトテニス教室への参加経験者が、新しくクラブが結成したり、既設のクラブに加入したり

して、日本OG軟式庭球連盟に加盟し、全日本レディース団体戦(都道府県対抗)の選手や、監督となって活躍をされたりするようになってきました。この家庭婦人ソフトテニスの中心的なリーダーとして、新浜宮子氏が真面目に意欲的に取り組んでおられます。

小学生ソフトテニス教室参加者を中心に長崎健三氏がクラブを結成され、指導を続けられました。その成果が、平成七年の全日本小学生選抜個人戦で、女子がベスト8に、男子がベスト16となりました。その上、中学校に彼等が入ってからも、平成十年の全日本中学校選抜大会個人戦で男子ペアの森本・毛利組(中萩中)が第三位に入賞と大活躍をしました。監督は藤田裕彦先生、コーチは長崎健三氏です。家庭婦人と小学生への普及

が徐々に進んで来ましたし、順調に活動も行なわれていますが、これからの益々の組織の拡大と技術向上を図ることが望まれます。

私は、中学校で部顧問をしておりましてので、特に中学生対象に傾注しがちで、一般・婦人・小学生・高校生対象は、副会長の馬越氏や大島理事長に任せきりで、若い理事には、特にお世話をかけ、申し訳ないことをしました。

平成三年に私は、教師を退職し同時に会長を辞し、馬越氏を迎えました。副会長には土屋昭三氏を迎え、理事長には大島健二氏が留任されました。

西中時代の教え子達を中心に、中学生対象の大会を創り、後援をする案が出て、その準備に入り、平成四年から阿部旗近県中学生大会が誕生し、今

年で第八回を終了しました。四国、近畿、中国、九州から参加があり、質の高い大会として人気があります。新居浜市、愛媛県の中学生の実力アップを狙った大会でもあります。

又、高齢者の増加に伴い、シニア大会を平成六年から開催し、男性六十才以上、女性四十五才以上を対象にして、親睦と健康増進を目標に楽しんで頂いております。今年で六回目となり、四国は勿論、岡山、大阪からの参加もあります。新居浜老童ソフトテニス大会の名称で男女混合籤引きでチーム編成という独特の運営方法を取り入れ、盛大に催されています。

平成十年から五代目会長に土屋氏、副会長に大島氏、理事長に山崎邦雄氏が迎えられ、連盟の年間運営計画や活動方法の見直しが図られ、親睦と技術向上

への効果的な活動が始まっています。今後の問題点は、小学生から高齢者までの幅広い各層の要望をどのようにして集め、その要望にどう対応するかにあると思います。

今までの業績の中で最も偉大なものとして、私が強く思い起こすのは、新居浜市立商業高校女子軟式庭球部が、昭和四十九年のインターハイで団体優勝し、全国制覇を果たされたことです。監督は、小西俊博先生(現尽誠学園高校副校長)で、新居浜北中、中萩中、南中へ勤務された後、市立商業高校に転勤され、指導に当てられました。商業高校のコートには、土屋氏、大島氏、他に北中時代の教え子達が集まり、先生の手足となって強化練習の手助けを継続的にされていたのが印象に残っております。

新居浜市軟式庭球連盟の今が

あるのは、多数の先輩や仲間、積極的な協力に負う所が大変多かったと思います。今後もこの仲間意識を大切に育て、強力なつながりのもとで、発展し続けたいと思います。

私と軟式テニス

馬越伸夫

私と軟式テニスとのむすびつきは中学一年の時、先生方がラケットを持ち、ボールを打ち合っていたのが強烈な印象に残り、自分も打ってみたいなど思ったのが動機でした。中学時代は現在のようにテニス部もなく、仲間四〜五人と遊び半分でテニスを楽しんでいました。

新居浜東高入学式の日、テニス部に入部し、それから一ヶ月

間、今は亡き東高OBで市役所勤務の山内氏に市役所裏の二面のコートで特訓を受け、初の対外試合(現在の近県大会)に出場しました。一回戦は4-0の完勝、二回戦は4-0の完敗で、

これが悔しくてテニスにとりつかれました。ペアが一年上級生だったので、高校二年を最後にテニスをやめました。

二回目のテニスとのむすびつきは、十五年後、息子の担任の神野環先生(庄内町)との出会いでした。高校時代に持っていたラケットに目を留め、一度自宅のコートへ来て下さいとのこと誘いを受け、十五年振りにボールを打ちましたが、女の先生に完全に打ち負け、これがきっかけで又テニスを始めました。

以後テニスとずっと関係しておりますが、理事長当時、旧市営球場で北側にあったテニスコ

ートが市営球場改修の為、河川敷への移転の話があり、教育委員会、都市計画課等へ体育協会の協力を得て、何度もお願ひし、現在のテニスコートが完成しました。一番の想い出です。

当新居浜市軟式庭球連盟は、一般クラブ、レディース、住友各社、高校生、中学生までと非常に幅広く会員が交流をしております。これらも益々発展すると確信しております。これも諸先輩方の努力の賜物だと思っております。最後に、体育協会創設五十周年おめでとうございます。今後益々の御発展をお祈り申し上げます。

テニスとの歩み

新居浜市軟式庭球連盟会長

土屋 昭三

このたび、新居浜市体育協会の発足五十周年を記念して「新居浜市体育協会史」が発刊される運びとなりました。軟式庭球連盟にとりましても、大変喜ばしいことであり、会員一同からお祝い申し上げます。

私は、平成十年四月一日より前会長馬越氏の後を引き受け、まだ日も浅く、まだまだ未熟者でございます。

永年にわたり会長として、軟式庭球連盟の発展に誠心誠意で努力されました馬越氏には、その労をねぎらい心より感謝いたす次第でございます。

私は現在、理事長はじめ役員の方々にすばらしい人材を得ることができ、新居浜市軟式庭球連盟の限らない発展を強く願ひ、

会長の任を全うすべく頑張っております。

私こと、昭和十七年八月山梨県に生まれ、富士見中学校時代にテニスと出会っております。なお、富士見村(現石和町)は、日本一のテニス村として全国に紹介され、昭和二十四年十月、社会体育優良団体として国体開会式場で表彰を受けています。恵まれた環境の中での練習成果、中学校三年生では個人団体共に県優勝、県立石和高校二年生の時にはインターハイ第三位(団体戦)でした。

第二のふるさとである新居浜でのテニスとの歩みは、私の会社の転勤による昭和四十二年四月から始まりました。江原様(住友重機械)と出会い、住友クラブにてテニスをするようになりました。

そして、新居浜西高にて毎日

練習、この昭和四十二年、白石敬二、近藤徹雄が国体出場、団体三位と好成績をあげられました。

昭和四十六年、和歌山国体では、成年男子の上甲・村前組が素晴らしい活躍、見事に優勝されました。さらに、昭和四十九年には、新居浜商業高校がインターハイで優勝、国体では第三位となりました。このような頑張りの選手達と共に私も練習させてもらいました。

テニスを通じて、実に多くの仲間と出会うことができました。テニスとの様々な歩み続け、今なお若者、高齢者と幅広い世代の人達と体を鍛え、技を磨くのはもちろんですが、何よりお互いの心の触れ合いがたまらなくうれしいのです。

さて、この記念誌にどうしても書き残しておくべき歴史的事柄があります。それは、「軟式

庭球」の名称変更と国際化」です。

「軟式庭球」は、明治十七年(二八八三年)に日本人が発明し、日本で生まれ育った競技です。その伝統ある競技名が、平成四年四月一日を以て「ソフトテニス」と名称が変更されました。そこで、平成五年(一九九三年)に(財)日本軟式庭球連盟から(財)日本ソフトテニス連盟に名称が変更になりました。

「軟式庭球」のめざましい普及発展により国際化されたのが、このように変更された大きな要因になっていると考えられます。名称変更に伴い、競技ルールも「ソフトテニス国際競技規則」として、大幅に変わりました。

「国際ルール」となり、最初は選手はもちろんですが、特に中学・高校の指導者には戸惑いもあり、いろいろと大変な苦労も

されたことと思います。

当初二、三年間、一般・成年については国際ルールで競技、壮年については旧ルールで競技し大会運営されたこともあります。改正された当初の手さぐりの

状態からは一歩前進したように思われます。しかし、指導者講習会、公認審判講習会等に取り組んできましたが、技術的にはまだまだでしょう。今後は特に小学生、中学生を中心に基本を正しく指導することに努めます。

平成十一年、国民体育大会成年男子の部に愛媛県代表に、新居浜より「町田・神野組」が出場、大活躍しました。今後、わが新居浜より、愛媛県代表選手が多数となるよう、技術、戦術はもちろん、体力や心理面のレベルアップも図っていきます。指導者の連携を一段と密にし、さらに会員の増加とともに、より

親しまれる健康スポーツとなることをめざします。

近県大会、阿部旗大会がさらに充実した大会となるよう張り切って運営にあたる所存でいます。

歴代会長はじめ先輩諸氏のことまでのご努力と、連盟役員の方々のご尽力、ご協力に対して敬意と感謝を心より申し上げますと共に我が連盟の発展を願っています。

この道を歩む

小 西 俊 博

「ニイハマ」―それは限りなく懐かしい響きをもって私の耳を打つ。昭和二十九年、ほとんど知らなかった新居浜に、教師生活の第一歩を記すことになった。自分でも予想しない人生

が展開する。

テニキチ先生誕生

新居浜北中は、とにかく活気があり、クラブ活動が盛んだった。放課後になると、運動場は芋の子を洗うような状態で、よくあれで怪我をしないものだと思うくらいだった。赴任して二、三日後、顧問になったことを知った部員が早速引つ張り出しに来た。

当時二面のテニスコートが運動場の南西の隅にあり、そこへもよく野球のボールが飛んできた。やがて宿直室に居つくようになり、練習も時間かまわず真っ暗になるまでやっていた。月の明るい夜など、サッカー部と張り合って九時近くまでやっていたこともあった。どんな練習をしていたのかあまり記憶はないが、基本練習ばかりやらせていたのではないかと思う。その

ころは文部次官通達というのがあって、中学生の対外試合が禁止されていた。だから練習試合もできない。今の中学生を見ているとうらやましい限りである。試合は県大会の予選と県大会のみ。その県大会も現在のような学校対抗ではなく郡市対抗である。予選は個人戦で、その上位三組が郡市代表として県大会に出場していた。学校対抗になつたのは昭和三十一年度からである。個人戦が加わるのはそれに遅れること三年、昭和三十四年からになる。

昭和二十九、三十年は女子が強かった。が美須賀中学に歯が立たず、二年続けて準優勝に終わる。そのときの中心選手が清水で、後年クラレ西条で活躍した。個人戦のなかった時代、ほかに強かったなと思うのは高田・大森組(昭和三十二年)、岡

田・近藤組（昭和三十三年）である。男子と打ち合っても負けなかった。男子には後に電々四国

で活躍する吉川がいた。芝・杉野組（昭和三十二年）も個人戦でやらせたかったペアだ。粒の揃った昭和三十三年、藤川・近藤、佐藤・安藤、江原・加藤で念願の団体優勝をする。彼等も個人戦があったらおもしろかっただろうなと思える力を持っていた。翌年、江原は劣勢を予想された対西中戦、大将にあててくれと直訴してきた。私ははずすつもりでいたから危惧したが、絶対勝つからと言うので、やらせてみたら勝ってしまった。こんな選手がいたら監督も楽しいのだが、それ以後こんな選手にはお目にかからない。彼は新居浜西高へ進んで、高橋とのそのままのペアで四国高校選手権をとったが、自分で考えてやれる、プ

ラス思考を身につけている子だった。

ここで忘れてならないのは今は亡き芝さんである。芝さんからはいろいろなことを学んだ。何一つ知らなかった私が指導者として今日あるのは、芝さんのおかげだと思っている。ああしろ、こうしろと口で教える方ではなかったが、しておられること、言っておられることの中に教えがあった。私がやる気だと見てとると、一色校長や市に掛け合って、運動場の南側にフェンスで囲われた立派なテニスコートを二面作ってくれた。しかしこのテニスコートも運動場の拡張で移転しなければならなくなり、東の端、プールと校舎との間に移すことになった。ところがやや狭く、ベースラインから後ろが五・五メートル、テニスコート間三メートルという寸

足らずのものになってしまった。しかし三面になったことで効率のよい練習ができるようになった。ところがこのように環境が整ってくるのと裏腹に部員の数は減っていった。多いときで一学年六・七人、女子になると三、四人がいいところだった。

体育館が新設されると、当時の中学校では珍しかったと思うが、テニスのできる設備、器具が整えられてあった。東京インドアの開催される以前のことだから、すごい先見性を感じるのだ。余談になるが、(株)ゴーセンがナイロンガットの製造に乗りだしたのもこの頃で、芝さんからいただいで張って見たが、いくら強く張ってもすぐ伸びてしまっただけのものにならなかった。たしかハイシープという製品名だったと思う。ヨネックス株が米山工業という社名でアルミの

ラケットを売り出したのもこの頃である。最初のは溶接部分がすぐはずれたが、次に出したのにはある程度使えた。次いでウッドのラケットを出したが、これはバランスがめちゃくちゃで全く使えなかった。現在、両者は共にトップメーカー、技術革新のすごさに今さらながら感服させられる。

主力の坂上を怪我で欠き男子が惨敗した昭和三十六年、一年生に素質のある選手が揃っていたよしこれで巻き返せると夏も合宿し、練習に熱の入っていた矢先、中秋中への転勤を新聞で知る。当時は転勤の内示などなく、四月一日朝の新聞発表を見て知るしかなかった。初めて経験する転勤無情の新聞を見て泣いた。

最強「真鍋・越智組」
当時の中秋中は、全国でも珍しい「清掃」の研究指定校だった

た。黙働・皆働・静働をテーマに師弟同行の実践校だったから、古い木造の校舎は隅から隅までピカピカだった。また「提灯学校」の異名を持っていた。補習授業を遅くまでやるので、提灯をつけて帰らねばならないというのだ。えらいところへ来たなと思った。

北中に気持ちを残す私に、西原校長の一言はこたえた。「お前は俺が連れて来たんだ。お前は中中学の教員だということを忘れるな。与えられた条件の中で最高を尽くせ。今年は(三年の担任をしているから)無理かもしれないが、来年は必ず一年に下ろす。テニスコートは今年中に作る。私は目の覚める思いだった。「与えられた条件の中で最善を尽くせ」は私の生き方の一つ指針ともなった。

「運動場は上下二段になって

いて、下にはバレーボールコート二面、バスケットボールコートが並び、その北側にポールのうつむいたテニスコートが一面、あとは雑草が生い茂り、山羊がつながれていた。測ってみると三面は十分とれる。ある日のこと、西原校長は全校生徒に敏、じょうれんなどを持ってこさせ、午後の授業をカットして一斉作業で草っ原を一変させてしまった。やがてダンプカーで花崗土が運ばれてくる。意外にいい土だった。整地されると鉄製のネットポストが立った。みんな校区の人達の寄付だった。一か月余りでピカピカのテニスコートが三面もできあがった。

翌年、新入生が五十名入り入部してきた。この中に金の卵がいたのだ。西原校長もよくテニスコートへ出てこられた。時々生徒の相手をしてくださったが、

右手、左手両方を器用に使ってプレーされていた。

昭和四十年、県大会で団体・個人ともに圧倒的な強さで初優勝を遂げる。個人戦は一位・二位・三位独占だった。特に大将の真鍋・越智組は、私が教えた選手の中で一番強かったかもしれない。個人戦決勝の同士討ちで二ゲームを落とした以外全部シャツアウトだった。県大会前に済美高校へ連れて行っても二敗くらいしただけだったと思う。四国大会、全国大会が開催されるといふ噂があり、祈るような気持ちで待ったが、来年度からということのなり、ガックリだった。

済美高校の松垣先生、宮崎先生の熱心なお誘いがあり、ペアが分かれてしまう可能性もあった。私自身も全国で羽ばたかせてみたいという欲もあって積極

的に勧めた。結局、真鍋・越智・高須賀・森川の四名が済美高校へ進学した。真鍋・越智組が、二年次インターハイで三位に入賞したというのを聞いたときは嬉しかったが、もともとっと伸びてほしい選手だった。

西原校長はこの年を最後に勇退された。この上ないプレゼントができたと思った。しかし驚いたことに私も転動していたのだ。

テニスコートを作っただけ新居浜南中でもまた三年生の担任だった。「テニスのこととは考えずにしっかり勉強されてくれ。」文テ校長と異名をとる上田校長の言葉である。当時文部省学力調査というのがあって、香川県を抜いて学力日本一に駆け上がったときだった。生徒が帰るのは常に暗くなってから。ここそ提灯学校だった。南中に

は、北中時代の教え子の岡田が
体育教師として勤めていたが、
こんな状態で開店休業といった
ところだった。

ところが、翌年、どうした風
の吹き回しか、テニスコートも
改修するからテニスをやれとい
われた。それまでのテニスコー
トは北西の隅にあつて、一番低
いところだった。だから雨が降
ると、運動場の水はみんなテニ
スコートの方へ流れる。そこで
暗渠排水とテニスコート面の嵩
上げをお願いしたら簡単に〇不
された。しかし、できるだけ費
用を安く上げるために、建設省
へお願いをして、横を流れる国
領川から栗石を取らせてもらう
ことにした。ここでも全校生徒
の手を借りて、暗渠の溝は一時
間ほどきれいに栗石で埋まっ
てしまった。土選びに苦労した
が、素晴らしい二面のテニスコ

ートができあがった。水はけも
申し分なかった。が、残念なが
ら部員が集まらない。

三年目（昭和四十三年）、一年
生の女子に素晴らしい素質を持
った子達が集まった。勝てるチ
ームになるという予感があつた。
選手達は日増しに逞しくなつて
いった。今度は四国大会、全国
大会への夢もある……。

ところが好事魔多しとはよく
言つたもので、こうした期待が
ふくらんでいるとき校長室へ呼
ばれた。教育課長が来られてい
て、市立商業高校へ行けという。
晴天の霹靂という言葉があるが、
そのときの私はまさにそんな思
いだつた。国語が教えられて、
クラブ活動の指導ができる者と
いうことで白羽の矢が立つた。
高校の方がやり甲斐がある。給
料も一号棒上がるーどう言われ
ても私には動くつもりはなかつ

た。が教育課長の最後の言葉に
私も観念せざるをえなかつた。

三年前は西原校長に断られたが、
今年の人事はもう終わっている。
中学校にお前の籍はない。（新
商）へ行つて、どうしてもいやな
らまた中学校へ戻してやるー私
は渋々退職願に判を押した。

二度あることは三度というが、
今度もまた後ろ髪を引かれる思
いの転勤だった。二年後、この
メンバーの中から抜け出した合
田・寺屋組が四国大会で優勝し、
全国中学生大会でも健闘よく第
三位に入賞する。また和洋女子
大に進んだ岩崎はインカレをと
り、実業団でも活躍した。

やつたぞ全国制覇！
高校ということで、ある程度
構えて授業に臨む日々だったが、
日ならずして慣れた。中学校と
あまり変わらない感覚でやればい
いんだと悟つた。それからは楽

だった。部員はかなりいたが、

男子は三名を除いて他は全部初
心者。それにひきかえ女子は西
中時代に県大会で団体優勝を経
験している伊藤がいて、かなり
レベルが高かつた。しかし日曜
日に練習しない体質をどう変え
ていくかが難物だった。

ところが案ずるより産むが易
しで、毎日出ていると次第にこ
ちらのペースにはまってくる。
それと一緒に力もつけてきた。
県総体団体戦は第五シードのパ
ツキンから勝ち上がつて、準決
勝でこれまで九連勝を刻んでき
た済美と対戦。伊藤・下河組が
大将を破つて会場を大いに湧か
せたりもした。しかし機はまだ
熟さない。

ここで追い風が吹いた。イン
ターハイでハンドボール女子が
優勝、バスケットボール女子が
四位、ハンドボールは続く国体

でも優勝したのだ。たしかにすごい練習をしていたが、自分達の仲間が日本一になったということは、選手にとっても、私にとってもものすごい刺激になった。

公立高校、それも職業課程の高校の悩みの一つは選手の獲得である。中学校へお願いには行くが確約ができない。それでもぼつぼつと集まるようになった。私と一緒に入学した長野・鈴木が辛抱してついてきてくれたのが大きい。四十六年、このペアは一気に県一位に駆け上がる。決勝戦での二人の対話がおもしろい。試合途中は、「山での辛さに比べたら、こんななんちゃやない。がんばろや。」と言いつつたという。(注 山とは部員が殺人コースと呼んでいた星越山の山登り)またゲームカウント2:2と追いつかれたときは前衛

の鈴木が「私、出るけんの。抜かれても知らんよ。」これは私も聞いた。日頃はおとなしいこの子が……と思ったものだった。そこから突き放して初優勝。ここから新商の快進撃が始まる。長野・鈴木組は、インターハイ初出場ながら四回戦まで勝ち進み、和歌山国体にも出場した。

この年は、愛媛の軟庭界にとって記念すべき嬉しい年だった。西条高(愛媛大と、私と同期だった宮本君の率いる今治工業がインターハイ団体優勝、国体で一般男子が優勝を遂げた年だった。これを機に愛媛のボルテージは一気に上がっていく。この上昇気流に新商も乗った。四十七年、済美の十三連勝を阻んで団体戦初優勝、個人も三木・星加組がとった。そしてインターハイ学校対抗に初出場。夜行列車で行った酒田は遠かった。

そのときのことだ。「アライハマ商業」と言われたのは。初出場のハプニングだった。知人に言わせると「ニイハマ」なら「居」はいらない。あるから「アライハマ」と読んでしまう。——そうかと変に納得したりもした。

第八シードのむずかしい位置だった。二回戦で「土岐商業(岐阜)」。三回戦の対宇出津(石川)、三木・星加組で先制しながら三番勝負をファイナル負け。ベスト∞を目前に涙を飲んだ。しかし、初・出場のプレッシャーをはねのけての四勝は評価できるし、二年生の千葉・岩崎、一年生の伊藤・真鍋には大きな自信となった。また姉妹校ともいべき松蔭高校が団体優勝し、優勝というものを身近に感じさせてくれた。これも大きな収穫であった。選手達は、これ以後「全国優勝」を口にするように

なるのだ。

昭和四十八年三月、長駆して千葉県市川市での全国高校女子合同強化練習会に参加する。三十数試合を戦って敗れたのは広島女子商の一敗のみ。これには選手自身が驚いたらしい。「あんなにやれると思わなかったわ。」という言葉がよくそれを物語る。グリーンのセーターを着ていたので、コーチに来ていた中尾、時安、井伊、稲垣など、当時の日本を代表する選手から「グリーンちゃん」といつてかわいらがられた。彼らに目をかけてもらったのも大きな収穫だろう。

県総体は団体戦二連勝、個人も渡部・岩崎組が勝って三連勝を飾る。続く四国大会も鴨島商を3:0で破って初優勝、個人も千葉・真鍋との同士討ち準決勝を制した渡部・岩崎組が初優勝を飾った。浜田・津吉組、伊藤・

寺尾組もベスト8に入り、インターハイへのいいステップとなる。

ところで、満を持して豊橋入りしてからは、その氣勢をそぐように連日の雨。練習にならぬ。鈴鹿にある旭ダウの体育館を借りて練習し、終電車で帰ってくるといふ有様。試合当日もテニスコートは軟弱で、すぐボールがふいてしまう。個人戦は伊藤・寺尾組が五回戦に進出したにとどまる。そして勢いこんで臨んだ団体戦も、昨年同様三回戦の壁を崩せなかった。相手はその年優勝の指宿商業(鹿児島)であった。惜しまれるのはトップの伊藤組がゲーム212で迎えた五ゲーム目、レシーブサイドで013の絶対ともいふべきチャンスを与えたことだ。揚句ファイナル負けを喫し、二番は一で締められて万事休す。とれるポイ

ントは確実にとおかねば勝ち逃げていく——手痛い教訓だった。

そして昭和四十九年、三度目の挑戦で念願の優勝を果たす。スコアだけを記しておこう。新居浜商の二熊本中央女子伊藤・大石110山田・黒木坂上・松浦14田端・住本矢野・津吉913中原・森第三試合はレシーブキープで315、412、214、513、0412という、まさに死闘。連盟の機関誌「軟式庭球」で「鍛えぬかれた強さ」との賛辞をいただいたが、ほんとによく勝ったものだと思います。

残念だったのは日韓高校スポーツ交歓競技会に出場できなかったことである。税関の人が、熱が出るかもしれないと二の足を踏むのを、無理にたのんで、腸チフスとコレラの予防注射を一度にやってもらい訪韓に備え

ていた。八月十五日、朴大統領狙撃事件が起き、夫人が死去。

日体協は中止を決めた。初の海外遠征に燃えていた選手の落胆はいうまでもない。私はその後、尽誠で二度行く機会があったが、彼女らには、その機会が永久に失われただけに口惜しい限りである。

男子の曾我部・高橋組もよくがんばって、創部以来初のインターハイ出場を果たした。愛媛県のレベルが高く、女子にイニシャチーブをとられながら、しかもぎりぎりの人数でよくがんばったといえよう。

私もまた果報者といわねばなるまい。三年目に県総体個人優勝、四年目に団体優勝、五年目四国大会国体・個人優勝、そして六年目全国優勝「した」というよりも「させてもらった」というべきであろう。毎日のよう

にラケットを自転車の荷台にくくりつけて来られて、乱打の相手をしてくださった上甲さん。

暇を見つけては来て一緒に練習をし、ゲームの相手をしてくれた新居浜庭連の若い力。大畠さんは広島さんのキチツとしたテニスを、土屋さんは山梨の豪快なテニスをを見せてくれた。また三島庭連の石村さんなどもよく顔を出してくれた。日曜日などは、さながら対抗戦のような有様で、今のような機動力もなく、経済的にも恵まれない新商が、短期間に全国制覇という偉業をなし得たのは、彼らに負うところが大きい。

芝さんのことは前にも書いたが、このことも是非書いておきたい。それは市営テニスコートのことである。市役所裏の二面が庁舎の建設のため取り壊されてなくなっていた。芝さんは市

と掛け合って復活させようと奔走されていた。苦勞の末、新須賀の野球場北側に空地を見つけ、何度も市役所へ足を運び、議員さんをつつき、とうとう四面のテニスコートの新設にこぎつけた。工事中も毎日のように来ておられたが、どう話をつけたものか、強引に五面にしてしまった。市からはだいぶん文句を言われたようだが、支障が出たらのけるといふことで、とうとう納得させてしまった。

そしてテニスコート開きとして近県大会を企画、堺の小橋組（小橋は四十六年度天皇杯チャンプ）大阪の北村さんなどを招いて盛大に行われた。昭和四十七年のことである。高校生たちに大きな刺激となったのはいうまでもない。

また韓国へもたびたび出かけて交流を深めておられた。四十

七年の暮れだったと思うが、韓国からレディスのチームを招いて、日韓の対抗戦を企画された。日本側は往年の名選手―北海道の挽地さん、京都の明井さんなど錚々たる顔ぶれだった。西日本連盟の池田会長も来られ、これが〇〇連盟の発会式ともなった。余談だが、韓国のメンバーは前衛が一人足りないので貸してほしいという。岩崎を行かせたところ、その後衛の方が岩崎を非常に気に入って、是非韓国へ連れて帰りたいと言いだした。

あまり熱心に言うので、岩崎は目に涙をいっばいためてみんなの後ろに隠れる。みんなが大笑いする一幕もあった。

頭を悩ませたのはレセプションだった。あれこれと知恵を絞っても名案は浮かばない。誰かが、在日の韓国の方をお願いしたらどうだろうと言いだして、

それに落ち着いた。芝さんと一緒にお願ひに行ったところ快く引き受けてくださり、韓国料理でのレセプションということになった。思いがけなかったように、韓国の選手は大変喜んでくれた。私も豚足だとかニンニクの芽の漬物とか珍しいものをたくさん食べさせてもらった。いい思い出になった。

昭和五十年度は、前年度優勝のおかげで推薦での出場だった。が選手が育っていなくて二回戦で潰える。朗報は、今年度から「全日本高校団体選抜軟式庭球大会」がインドアで開催されるということである。新人戦の勝者が県代表となり四県代表がリーグ戦を戦い一位が出場権を得る。

第一回四国予選は愛媛県で開催することになり、男子が新田、女子が新居浜商を会場として二

月十五日に行われた。女子の出場校は新居浜商、丸亀、徳島商、土佐女子の四校。エントリは国体方式で監督一名、選手六名だから苦しい。リーグ戦の結果、順位は一位新居浜商、以下土佐女子、徳島商、丸亀で、なんとか出場権を得た。

本大会は、日連、高体連、サンケイ新聞社、サンケイスポーツの主催。昭和五十一年三月二十五日（男子）、二十六日（女子）京都府立体育館で行われた。三月の京都は寒く、日陰は薄氷が張っていた。初めてのインドアは、やはり戸惑いが大きかった。一週間の合宿でやや慣れたかに見えるが、二、一年生主体の若いチームだけに馬脚を現してしまった。準々決勝の博多女子商戦、314、214で敗れ、ベスト8に終わる。これからはインドアを視野に入れた練習をしなければな

らないと思った。

私は、この試合のベンチを最後に、郷里の香川に帰らねばならなかった。後に残した選手には申し訳なく思った。二年後、岡山インターハイで、稲田・大石組が個人三位、青森団体が準優勝と健闘してくれたことを思うと、この思いはなおさらに強い。

北中以来四十五年、軟庭(ソフトテニス)と共に歩んできた。というより、軟庭が私を育ててくれた。軟庭があったからこそ今日の私がある。「この道よりほかに、我を生かす道なし。この道を歩む。

北京アジア大会出場の

思い出

津乗 弘美

中萩中学時代は、男子顧問の村上先生に加え、女子顧問の大西先生(息子さんは僕の同級生)にも御指導頂き、個人戦で津乗・渡辺が県総体・四国大会で優勝、団体戦でも津乗・渡辺、大西・福田、松本・安岡で県総体優勝、四国大会準優勝を果たすことができた。県総体個人戦では、重黒木コーチの車で松山の堀之内コートに向かう途中、前衛の渡辺君が体調を崩し、回復するまで自分が頑張らねばと奮起したのが功を奏し、四国大会では団体戦で敗れた丸亀西中の相手が個人戦の準決勝で前・後衛ともに足を攣るという幸運(失礼!)にも恵まれた。一方、県総体団体戦の決勝戦では、僕のペアが負けた後、三番勝負で松本・安岡がピンチを救ってくれた。しか

し、僕のペアは四国大会の団体決勝戦でも敗れ、チームに貢献できなかったことが残念だった。

新居浜西高時代は、井手上・高山・内田先生の御指導に加え、一つ上の条野主将の強烈なりーダーシップのもと、冬場には外周五周・腕立て・腹筋・背筋各百回のトレーニングを毎日欠かさず行なうなど、勝負に対する厳しい姿勢に引っぱられていった。また、自分でも帰宅後、毎日五キロのランニングを欠かさなかつた。その甲斐あって二年時には糸野・福田(三年)、津乗・神野・鈴木・菊田(二年)で県総体団体優勝、個人戦は津乗・神野でベスト4。三年時には個人戦優勝。

団体戦は、菊田君の転校の痛手を後輩の頼もしい二ペア(ともに全中に出場)がカバーし、津乗・神野・鈴木(三年)、小坂・藤田(二年)、西原・真鍋(一年)で

臨んだ決勝リーグの最終戦、個人戦は地区予選敗退の西原・真鍋がインターハイに個人戦三組出場の今治北にG4-1で勝つて、準優勝ながらインターハイの出場権を得た(地元開催。昭和五十五年のため)。その結果、二年時の宮崎国体出場と合わせて計五回全国大会に出場することができた。

しかし、当時の僕は県で勝つことしか頭になかったことと、アタック中心の単発なテニスで、知っている相手には強いが、知らない相手と当たる県外ではほとんど勝つことができなかった(一方、鈴木君のペアは大物食いで有名だった)。僕のペアの神野君は、高校で後衛から前衛に転向した努力家であった。その彼が、三年の時インターハイ三回戦、東京・駒大の佐藤・広田にG1-2とリードされたチェン

ジサイドの時に「なんか分かってきた。津乗、もう少しボールをつないでくれ。」と言った意味が理解できず、結局僕は彼のイメージするゲーム運びができなままG1-4で敗退し、雨天のため体育館で実施された団体戦でも初戦で敗れて、もう一つ期待に答えられずに高校での全ての大会が終わった。

そんな状況から抜け出す転機となったのが神戸大学一年時の関西新進大会(一・二年生大会)の優勝であった。なかでも準決勝で対戦した天理大学の本荘・杉島は前年のインターハイチャンピオンと全国私学大学チャンピオンのペアであるが、レシーブをほとんど前衛オーバーから入りその返球を前衛が勝負するパターンで、雲の上の存在だと思っていたこのペアにG5-1で勝てたことは大きな自信とな

った。翌年のインカレでは二年上のインターハイチャンピオンの平井さんを擁する中京大学に勝って団体全国三位(準決勝で日大に敗れるまで八戦全勝)に入ることができ、四年時には西日本学生で個人戦準優勝、シングルス優勝を果たした。

更に、兵庫県教員になってペアになった、二つ年上の日大出身の米本さんのボレーやスマッシュは、クロスに打たれたボールやストレートへの中ロブが途中でフツと消えてしまったように思える程動きが速く、狙い玉の絞り方や読みの確かさ等、多くのことを教えて頂いた。社会人一年目の一九八五年には、鳥取国体で全国優勝。準決勝でこの後天皇杯を二連覇する山本・沼田(奈良県)にG4-1で勝って、社会人の中でもやっといく自信が付き、翌八六年の天

皇杯でベスト8(八七年もベスト8)になり、以後五年間、ナショナルチームに所属することになった。

ちょうどその頃、一九九〇年の北京アジア大会で、ソフトテニスが開業競技ながら採用される運びとなり(次回の広島アジア大会では正式種目)、それに向けて一九八八年には第一回アジアソフトテニス選手権大会が名古屋で開催された。僕は選考会を兼ねたナショナルチームを主とする全日本インドア北海道大会で二連勝し(八八年〓津乗・内田、八九年〓津乗・斎藤)、両大会に推薦で出場することになった。

一九八八年の第一回アジアソフトテニス選手権大会の団体戦では台湾戦の一番手で出場し、G5-1で勝利したもののチームは敗れ、同じく一番手で臨ん

だ韓国戦はG0-5、チーム0-3で敗れて三位に甘んじた。

個人戦も団体戦で敗れた韓国の一番手(この後個人戦優勝)に今度はG3-3まで競ったもののG3-5で敗れベスト8に終わった。

一九九〇年の第十一回北京アジア大会は、さすがに他の大会とは比べものにならないくらいの華やかさで、特に総合開会式の数々の催しには感動の連続であった。選手村へ出入りにはIDカードが必要で、会場と選手村との移動は、乗り込んだバスの前後を白バイ!?が警護し、信号を全て無視して、最優先で行われた。また、他競技の日本代表選手(サッカーのラモス選手、女子バレーの大林選手、ハンマー投げの室伏選手、体操の池谷選手等)とも平気で挨拶を交わしたり、写真を撮ったりと、今

まででない雰囲気を楽しむこともできた。しかし、それも束の間、前回の雪辱に燃えて試合に臨んだ。団体戦では、予選リーグの台湾戦、1-1で回ってき

た三番勝負で、G1-4から逆転して2-1で破り、準決勝でも中国をストレートで下して、決勝に進出。しかし、予選リーグで勝った台湾が準決勝で韓国を破り、再戦となった決勝では0-3で敗れて悔しい準優勝となった。個人戦では、ベスト8取りで団体優勝の台湾の大將ベア劉・頼をG5-3で破り、次も韓国の三番手に勝ってベスト4に入賞し、団体戦の銀メダルに加えて個人戦でも銅メダルを獲得することができた。なお、決勝戦では日本の上松・大橋がファイナルで韓国ペアに勝利し、一九八三年以来七年振りの国際大会での日本男子の優勝を飾っ

てくれた。一緒に表彰台に立って、日の丸が上っていくのを見上げるのは、何とも言えない気持ちで、時安監督をはじめ次々とコーチ・選手を胴上げして、喜びを爆発させた。

新居浜での当時は振り返ってみると、「五五総体」を高三で迎える年に当たっていたためか、中学一年の時から学年別大会など各種の強化事業があったことはラッキーであった。また、中学・高校を通して、素晴らしい指導者・先輩・同級生・後輩に恵まれたことは今更ながら幸せであったと思う。最後に、高校生の上に上甲さんをはじめ、大島・河合組、江原・近藤組、土屋さん、杉野さん、長崎さん、馬越さん、杉森さん等、新居浜軟式庭球連盟のたくさんのかたがたに試合やアドバイスを頂き、計り知れない多くのことを学ぶこと

ができたことに深く感謝している。

私とソフトテニス

新居浜市立北中学校教諭
新居浜軟式庭球連盟理事

横井 敏行

私とソフトテニスの出会いは、昭和四十六年に、川東中学校(神郷校舎)に入学したときである。現在市営コートを管理されている山内義男先生が熱心に指導されているのを見て自分も軟式テニスがしたいと思ったのである。中学一年の間は、山内先生の御指導のもと、一生懸命がんばったのを覚えている。しかし、山内先生が転任され、中学二年生からは、ほとんど練習らしい練習もせず、部が弱くなっていつ

た。中学二年生からは、校舎も川東中学校に移り、テニスコートもかわり、自分がキャプテンをしながら部が弱体していくのを、中学生ながら悔しく思ったのを覚えている。このように、中学生時代の軟式テニスとのかかわりは、不完全燃焼に終わった。

新居浜西高校に進学後、軟式テニス部に入部したが、勉強との両立に悩み、一年生の途中で退部してこれもまた不完全燃焼に終わった。これが、私の軟式テニスのプレーヤーとしてのすべてである。

こうして振り返るとき、「どうしてもっと一生懸命に軟式テニスに取り組まなかったのか。」とか、「山内先生が、転任されなかったらよかったのに。」とか、後悔の念などでいっぱいになる。自分が中学校の教師になり、

部活動を指導するにあたり、思ったことは、「自分のように部活動において不完全燃焼で生徒を終わらせないように指導しよう。」ということであった。新採用として赴任したのは伊予三島市立東中学校で、サッカー部を担当した。自分の専門ではないスポーツであったが、体当たりで取り組み、たいへんよい思い出となっている。

四年間の勤務の後、新居浜へ帰ることができた。新居浜の学校へ帰るからには、「軟式テニスが指導したい」と思った。新居浜市立東中学校に赴任するにあたり、どうしても軟式テニスが指導したいと願っていて、男子テニス部の副顧問として指導にあたることができるようになった。男子テニス部の副顧問として指導したのはこの一年間だけだったが、これがとてもよかつ

たと思っている。それは、主顧問が松浦英一先生で、本当に熱心で素晴らしい指導をされる先生だったからである。松浦先生からは、技術面よりも顧問としての指導にあたる姿勢や、コートづくりなどの環境整備について実にたくさんのことを教えられた。ありがたいと思っている。

次の年から、女子テニス部の顧問として指導にあたることになった。この女子テニス部を八年間指導したわけであるが、その間いきすぎたこともあったと思うが、よくついてきてくれた生徒たちに感謝の気持ちでいっぱいである。また、試合を通して、川東中学校の顧問で、軟式庭球連盟の会長でもある阿部茂樹先生にたくさんのお話を教えていただいた。それは、自分の心の宝物となっている。また、我が部の保護者でもあり、歌式

庭球連盟の新居宮子さんには、たいへんお世話になったり、いろいろなことを教えていただいた。東中学校での九年間は、本当に実り多い期間であったと思う。

次に赴任したのは、我が母校・川東中学校である。そこで男子ソフトテニス部をもてたのは、本当に幸運で、すばらしい二年間であった。良き生徒に恵まれ、良き保護者に恵まれた、夢のよくな時間であった。また、新居浜市の体育協会からは、優秀指導者賞をいただき、よろこばしいとともに、気恥ずかしかった。その後二年間、愛媛大学大学院に行くことになり、中学校の部活動からは離れたが、そこで小学生ソフトテニスとの出会いがあった。小学生ソフトテニスクラブ(新居浜ドラゴンクラブ)は、長崎健三さん、近藤昭仁さ

んが指導されてきたクラブであり、もう十数年の歴史がある。そのクラブのコーチとして加えていただいたのである。小学生の指導にあたる時、最良の基本の在り方について、真剣に考えることができた。全くの初心者で、純粋な小学生に教えるにあたっては、本当に責任の重大さを感じる。いろいろな考えさせられるものである。

今年から、私は、北中学校の女子ソフトテニス部の監督と新居浜ドラゴンクラブの責任者という二足の草鞋を履き、奮闘中である。小学生と中学生の指導の両立の仕方を模索している。是非、優秀な指導者のみなさんのご助言を賜りたいものである。